

虹

父さんすごかったんだ



大助さんが残した店を守る 泰世さん(右)と共子さん

177 次女の決断と年越しそば

放課後に食べる天ぷらそばがおやつ代わりだった。大下 泰世さん(26)は小学校からおおしたやすよ帰宅すると、たびたび店に行った。育ち盛りの娘のために父の大助さんが腕を振るってくれた。「お腹をすかせて食べるそばが大好き。だしが絡む天ぷらが子どもながらにごちそうでした」。コクのある甘いだしが絶品。いつも最後の一滴まで飲み干した。

富山市元町の大通りに面する「そば処 大庵」は1957年に創業した。泰世さんの曾祖父の代から続く。元々は焼き菓子を売っていたが、代ごとに形を変えて現在の「そば屋」になった。

日本画家、片岡球子さんの豪華な色彩の絵が壁になじむ。その一方で、かわいらしい絵本も棚にずらりと並ぶ。大人も子どもも懐深く招き入れようとしている。

おかみの共子さん(58)は見えないところにも気を配る。夏だけでなく、雪の降る冬も打ち水を欠かさない。「お客さんには清らかな気持ちでお店に入ってもらいたいです」と言う。

店を切り盛りしてきた大助さんは2023年7月に61歳で旅立った。今、次女の泰世さんが代わりに厨房に立つ。思い出の天ぷらそばは今、自分で作る。「『父がいなくなったから味が変わった』なんて、まだ誰にも言われていないんですよ」と笑う。

大助さんは東京の大学在学中から老舗で修業した。共子さんと出会ったのもその店だった。卒業後に2人は結婚。1989年に実家に戻り、家業を継いだ。

当時の店はそば屋というより、食堂のような趣きがあった。そばだけでなく、ラーメンもチャーハンもメニューに並んだ。出前も重宝がられた。

味を極めたかった大助さんは、メニューをそば中心に切り替えた。出来たてを提供しようと出前をやめた。これまで付いていた客が離れる可能性もあったが、味の追求を優先した。かつお節もしょうゆも選び抜いたものしか使わない。「本当はカレーうどんも好きなんですけど、満足するものがないから出していないんです」と共子さん。家族旅行をすれば、どこに行っても、そば屋を探した。ストイックな姿勢が受け入れられたのだろう。昼時にはカウンターもテーブルも客で埋まる繁盛店になった。

2人の娘は大学を出て就職した。飲食と

は全く関係のない道に進んだ。それぞれにやりたいことがある。75歳までか。80歳までか。店は大助さんと共子さんの体力が続く限りやろうと決めていた。そして、どちらかが店に立てなくなったら閉めよう決めていた。子どもたちに無理をさせようとは全く思っていなかった。

当たり前の日常が変わったのが、2022年4月。大助さんの腹からゴロゴロという音がした。クリニックに行くと言われたが、症状は変わらない。大きな病院で診てもらおうと、手術できる状態ではなかった。種がまかれたようにがん細胞が腹の中に散らばる腹膜播種という病状だった。ステージ4の末期がんだ。

医師には「この先ずっと付き合うことに



なる」と言われた。しかし、ステージ4を告げられても生き延びる人はいる。大助さんは希望を失わなかった。

6月まで自宅療養した。ジョギングを始め、体力をつけようとした。店はのれん分けした岐阜の店に勤めていた、いとこの古田宗弘さん(54)が手伝ってくれた。当時は別の仕事に就いていたが、古田さんは「先生、が築いたものを途切れさせちゃいけないという思いだけ」と駆け付けた。

7月から大助さんは店に復帰した。足取りは少し弱々しくなったが、生き生きとしていた。家族の目には「元気の源はやはり店なんだ」と映った。11月に検査を受けると、がん細胞が減っているという良い兆候も出た。不安を鎮めて、そば屋にとっての一大イベントに臨んだ。年越しそばだ。

コロナ禍の反動もあったのだろう。持ち

帰りの注文も、大みそかの来客数も例年以上だった。店の前には開店の午前11時から午後7時まで行列ができた。食事する時間どころか座る暇もなかった。

のれんを下ろすと、大助さんは小上がりで突っ伏した。いつもなら、そのままスタッフが打ち上げをする。しかし、その日は様子が違った。起き上がれないほど、消耗し切っていた。共子さんは「以前なら後片付けをする体力くらいあるんですよ。あの日は、そば作りだけでやり切った様子でした」

1月下旬、泰世さんが大助さんを心配して東京から帰った。正月の帰省から間もないのに別人のように痩せていた。顔色も血の気がない。

泰世さんは率直に伝えた。「もう、やめ

た。楽しみにしていたことはもう一つあった。長女の雅子さん(29)の結婚式だった。「それまでは頑張る」と家族に誓ってきた。

しかし、医師からは出席はかなわないと断言されていた。大助さんには内緒で結婚式は延期されることになった。本人に言えば、いらぬ気を遣わせてしまう。

残された日は少ない。みんな花嫁姿を見せたかった。「結婚式の前撮りの帰り」ということになって雅子さんはウエディングドレスを着て、タキシード姿の新郎と病室を訪ねた。

病院が気を利かせてくれ、部屋中を花飾りで彩ってくれた。大助さんがファンだったMr. Childrenの曲も流してくれた。大助さんは手を合わせて、「ありがとう」と声にならない言葉を繰り返した。

旅立ったのは、それから2日後。結婚式が当初予定されていた日だった。それも大庵の閉店作業の後だった。共子さんは「頑張っていて、頑張っていて亡くなるタイミングを見計らってくれたんですね」と言う。

泰世さんは今も店に残る。「継ぐ」と決めたわけではない。世話好きな常連客から見合いを勧められるが、東京でもう一勝負したい気持ちがある。向こうに恋人もいる。

とりあえず目の前にある目標は、年越しそばという大イベントを乗り切ることだ。

2023年の締めくくり。大助さんだけでやってきた仕事はみんなで協力してやる。材料の発注だけでも大変だ。手際よくそばを出す父の姿を思い浮かべては深呼吸する。「父はすごかった」と改めて尊敬する。

同じように作っても、季節どころか毎日そばの状態が変わる。麺の太さだって一定にならない。「こんなだけって父が打ったそばを思い出しています」

最近では自分のそばになかなか満足できない。富山に戻り、厨房に入った当初は「昨日より上手」と成長を実感できていた。きっと見る目が厳しくなったのだろう。少しだけ父の感覚に近づいたのかもしれない。大庵の新しい年が始まる。

そば屋に行くと、いつも「ざる」か「かけ」かと迷います。小さなことのように大きな決断です。こんなすてきな迷いを与えてくれる飲食店が身近にあることは、なんと幸せなことなんだろう。情熱を持って飲食店を支える人に感謝するばかりです。新年の「虹」もまちかどににじむ情熱に触れたいと思います。

「春雪」西治子



「虹」第8巻 販売中
最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141〜160回目までの20話分を取っています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時〜午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は2月1日(木)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社
企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局